4 交易された品々

ガラス玉などの装身具や石庖丁、石斧などの農工具、銅鏃などの武器を始めとした様々な品が、交易品として集められました。特に銅鏃の出土量は63点に及び、列島で最大級の出土量を誇ります。

完成品の状態で入手したもの

▲ 銅鏃（やじり）
弥生時代後期～終末期
（約2,000～1,800年前）
入手先の違いが、様々な形に反映されていると考えられます。

▲ 石斧
弥生時代中期後半～後期前半
（約2,100～1,900年前）
結晶片岩製の石斧は南庄遺跡（徳島県）で製作されたものです。

▲ ガラス玉・勾玉などの装身具
弥生時代後期～終末期（約2,000～1,800年前）
写真右上の勾玉は北陸地方産のヒスイ製、管玉は碧玉製。

▲ サヌカイト製石庖丁
弥生時代中期後半～後期前半（約2,100～1,900年前）
サヌカイト原産地の金山（坂出市）周辺で製作され、ほぼ完成品の状態で運びこまれました。

原材料を入手し、集落で生産したもの

◀ 朱（水銀）の調合用の土器
弥生時代後期～終末期
（約2,000～1,800年前）
仙薬（不老不死の薬）調合や彩色用の顔料の精製につかわれた土器。原料の辰砂は徳島県の若杉山遺跡から運ばれた可能性があります。

◀ 鉄製品（斧・鏃など）
弥生時代後期～終末期
（約2,000～1,800年前）
素材を朝鮮半島を始めとした他地域から入手し、集落内で最終加工である鍛冶作業を行っていました。